探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：府中市立府中学園

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
府中市立府中学園	34	840

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

・自己効力感が低い。
・コミュニケーション能力が十分ではなく，人間関係を円滑に築くことができていない。
・集団の一員としての自覚が乏しい。
・思考力・表現力に課題がある。
・生活科及び総合的な学習の時間の単元構成が毎年ほぼ同じものになっており，児童生徒が自ら課題を設定し，探究していくような学びになっていない部分が多い。

２　研究の概要

（1）研究テーマ及び研究のねらい

「学び続ける児童生徒の育成～探究的な学習の単元開発・実践を通して～」を研究テーマとしている。生活科及び総合的な学習の時間での探究的な学習の単元開発・実践を通して，児童生徒一人一人が学びを自分事として捉え，主体的に学び続けることができ，最終的には，変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を図ることをねらいとしている。

（2）資質・能力の設定について

本年度４月の校内研修において，全教員で生活科及び総合的な学習の時間の資質・能力について考えた。これは，一部の教員が考えるのではなく，資質・能力を全教員が意識して授業するという意図を踏まえたものである。１年から９年の各学年でグループに分かれ，各学年の児童生徒の発達段階を踏まえ，学校教育目標を達成するために必要な資質・能力を出し合った。研修後，各学年で考えた資質・能力を精査し，「知識及び技能」「課題発見・解決力」「コミュニケーション能力」「粘り強く学習に取り組む態度」「自己調整力」の５つの資質・能力を設定した。この資質・能力を基盤として評価規準，ルーブリック，単元計画，児童生徒の振り返りの視点，意識調査などをした。

（3）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

① 単元開発

② 資質・能力の育成に向けた手立て

③ 校内研修の充実

④ 自己調整学習の推進

【資質・能力の評価】

① 小中の系統性を踏まえた資質・能力の設定

② ルーブリックの設定

３　実践事例【探究的な学習の充実に向けての取組】

①単元開発

単元開発をするにあたって，はじめに３つの問いについての研修を行った。令和３年度広島県教育資料を基に本質的な問い，単元を貫く問い，個別の問いについて研修し，図１の「単元構想シート」を使って各学年で単元の３つの問いを設定し，それを基に表１，２の単元計画を作成した。

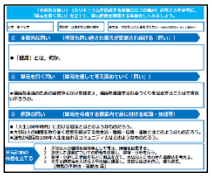

図１　「単元構想シート」

表１　単元計画　前半

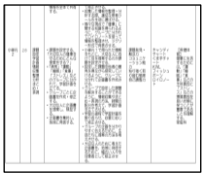

表２　単元計画　後半

②資質・能力の育成に向けた手立て

ア　課題発見・解決力の育成に向けた手立て

課題発見・解決力の育成に向けて，教員のみならず，児童生徒と共有する必要があると考え，「府中学園探究スタイル」と名付けた探究の過程を掲載した下敷きを作成し，児童生徒・教員全員に配付した。この下敷きを生活科や総合的な学習の時間のみならず，全ての授業において活用することで，探究的な学習の推進が図られると考えた。下敷きの表面（図２）は，探究の過程をイメージしたものとなっており，各過程を行ったり来たりすることで探究が進んでいくことを表している。また，「自分」とは，最終的には学んだことを「自分」に返すことを意味している。

下敷きの裏面（図３）は，対話のルール，後述する振り返りシート「学びゲット」，探究の過程の説明，考えるための技法であるシンキングツールを掲載している。

図２　府中学園探究スタイル（表面）

図３　府中学園探究スタイル（裏面）

イ　コミュニケーション能力の育成に向けた手立て

本年度も新型コロナウイルス感染症の影響により，地域の方々との交流が困難であったが，コミュニケーション能力の育成に向けて，ICT機器を活用するなどしてリモートで交流を図った。また，総合的な学習の時間は教科書もなく，答えのない課題に取り組むこともあり，児童生徒は何度も壁にぶつかることがあった。その際には，友達や教師との対話を重ねることで課題を解決することができた。

ウ　粘り強く学習に取り組む態度及び自己調整力の育成に向けた手立て

粘り強く学習に取り組む態度及び自己調整力の育成には，振り返りの充実を図ることが必要であると考えた。そこで，本校独自の振り返りシート「学びゲット」を作成し，その充実を図ることとした。「学びゲット」には，学習計画や振り返り，資質・能力の項目がある。これは３年生から９年生が同じ様式を使っている。学習の見通しをもつために，児童生

徒が学習計画を立て，さらに，設定した課題に対して，できたこととその理由，できなかったこととその理由を書き，身に付いた資質・能力に〇をすることで，自分の学習を振り返った。（図４）さらには，立案した学習計画がうまくいかなかったときは，赤ペンで修正したりしながら学習を進めることで自己調整力の育成を図った。（図５）

図４　粘り強く学習に取り組む態度

図５　自己調整力

③資質・能力の評価について

ルーブリックの作成については，９年間の系統性を踏まえた資質・能力を基に作成した。昨年度より，関西大学教授黒上晴夫先生にご指導をいただき，ルーブリックについての理論研修を経て作成している。このルーブリックは児童生徒と共有しており，振り返りの際に，そのルーブリックを参考に自己評価をしている。作成時において教員が意識したことは，ルーブリックが活動面でできるようになることを提示するのではなく，課題を解決するための方法や手順を提示することである。そのことが，児童生徒にとって課題をどう解決すればよいのかのヒントとなると考えた。（表３）

学習指導要領における教科等の内容	資質・能力（学校）	観点	A	B	C
知識及び技能	知識及び技能	知識	地域の名物や産業、そこに携わる様々な人の存在や思いを理解し、その人たちのすごさに気付いている。	地域の名物や産業、そこに携わる様々な人の存在を理解している。	地域の名物や産業、そこに携わる様々な人の存在を理解していない。
		技能	情報を比較し、共通点や相違点を見付けて分類したり関連付けたりしている。	情報を比較し、共通点や相違点を見付けている。	情報を比較しても、共通点や相違点を見付けていない。
		探究的な学習のよさの理解	地域の名物や産業、それに関わる人についての理解が深まったのは、自ら課題を発見し探究してきた成果だと気付き、さらに探究的に学んでいこうと考えている。	地域の名物や産業、それに関わる人についての理解が深まったのは、自ら課題を発見し探究した成果だと気付いている。	地域の名物や産業、それに関わる人についての理解が深まっていない。
			自分の関心から地域の	自分の関心から地域の	自分の関心から地域の

表３　第3学年　ルーブリック

④６年生の実践について

本年度６年生は探究課題を「防災」として，１年間取り組んできた。１学期は，「防災」についてのウェビングマップを使って考えを広げ，その後整理し，児童一人一人が課題を設定した。児童は，自分が設定した課題をインターネットで調べた。その調べたことをシンキングツールで整理し，スライドにまとめ，クラスで発表した。２学期になり，児童が，１学期調べたことが，８月の豪雨のときに役に立たなかったことを振り返り，２つの原因を考えた。１つ目は，課題が自分事ではなかったこと，２つ目は，１学期に発表して終わりになり，実行しなかったということであった。児童は，その原因を踏まえ，「何のために」「誰に向けて」を意識した課題を設定した。その中でも児童Ａは，１学期の課題，「動物は災害を予知できるのか」から，２学期は「近所の人に安全に避難してもらうために必要なことは何か」に変容した。これは，児童Ａが自分事の課題に視点が移ったからである。その後，情報収集を行い，シンキングツールを使って整理・分析し，現在，ポスターにまとめているところである。

４　研究の成果と課題等

本年度の児童生徒及び教員の意識調査における肯定的評価の変化は以下のとおりである。

資質・能力についての児童生徒対象意識調査

(%)

育成を目指す資質・能力	５月	９月	２月
課題発見・解決力	79.1	76.4	84.4
コミュニケーション能力	81.3	79.9	81.5
粘り強く学習に取り組む態度	90.9	86.9	90.2
自己調整力	80.6	78.4	82.3

表４　児童生徒意識調査

探究的な学習の在り方に関する教員意識調査

Ｑ：探究を意識した授業に前向きに取り組んでみたいと思いますか。　(%)

	はい	いいえ
令和３年５月	88.2	11.8
令和４年２月	97.7	2.3

表５　教員意識調査（意欲）

Ｑ：探究を意識した授業をしていますか。　(%)

	はい	いいえ
令和３年５月	49.0	51.0
令和４年２月	56.7	43.3

表６　教員意識調査（実施状況）

（１）成果

表４より，「課題発見・解決力」の肯定的評価の割合が２月には84.4%と５月に比べ5.3ポイント上昇している。これは，探究的な学習を進める中で，その難しさを感じながらも，探究のサイクルを繰り返すことにより，次第に自己のよりよい変容に気付いてきたからだと考える。また，表５より，「探究を意識した授業に取り組んでみたいと思いますか。」については，本年度12回の校内研修を実施したことで，探究についての理解が深まり，教員の「探究を意識した授業を実施してみたい。」という意欲につながったと考えられる。

（２）課題

表６より，「探究を意識した授業をしていますか。」に対して，肯定的評価の割合は56.7%であった。このことは，お互いの実践を学年やステージごとで交流する場面が少なかったため，自分の実践が探究的かどうかを確認する機会がもてなかったことや，各教科における探究的な学習について，教科担当が協議できる機会を多くもてなかったことなどが原因であると考えられる。

（３）今後の改善方策等

今後の改善方策として，次の２点を挙げる。１点目は，今年度の校内研修は理論的な内容が中心となり，教員の実践を交流する場面が少なかった。そこで，今後は，校内研修等で教員同士の実践交流を図る。２点目は，さらに探究を意識した授業改善をすすめるために，各教科の探究的な学習について考える時間を確保し，教科の方向性を共有するとともに全ての教科において，自己調整学習を取り入れる。